

この本をお読みになった方へお願い

あなたはこの本を読まれて、どんな感銘を受けられたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけます。このほか「カッパの本」ではどんな本を読まれたでしょうか。このつぎには、どんな本を読みたいとお考えですか。

この本には、一字でも誤植がないように願っておりますので、もしも、お気づきの点がありましたら、お知らせください。お手紙に「はてさて、や年齢なども書きそえて」

東京都文京区音羽二
光文社

神吉晴夫

長編時代小説 逃亡(上)

昭和41年3月15日 初版発行
昭和43年12月20日 24版発行

検印廃止 ￥330

著者 松本清張
東京都杉並区上高井戸4-1762

発行者 神吉晴夫

印刷者 堀内文治郎
東京都千代田区神田三崎町2
堀内印刷

発行所 東京都文京区音羽町2 株式会社 光文社
振替東京115347

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。(岩淵製本)

表紙の模様・意匠登録 116613

© Seityô Matumoto 1966

長編時代小説

とう ぼう
逃亡 (上)

『江戸秘紋』改題

まつ もと せい ちょう
松本清張



カッパ・ノベルス

霧	音と女	この家	入った家	逃亡	番小屋	女の家	牢屋火事	上巻目次
111	98	82	69	55	40	23	5	

暗黒	六ツ半	毘 わな	網の手	夜霧	湯島の行灯 あんどん	湯島の料理屋 ゆしま	飴売り あめ	秘密
242	226	212	198	186	172	159	145	130

本文のイラスト

御^み

正^{しょう}

伸^{しん}

牢屋火事

文政十二年（一八二九年）三月二十一日の巳の刻（午前十時）に江戸神田佐久間町河岸から火が出た。

この朝一時間前にちよつとした地震があったが、ちよど、出火の起こったところは、西北の風が土砂を吹き立てて、あたりが夜のように暗くなっていた。

おりから佐久間町河岸の材木商尾張屋徳右衛門の材木小屋の前では職人たちが焚火をしていた。

三月の末という、すでに上野の桜も散ったあとだが、この日は奇妙な天気ですら寒かったのである。

材木屋の本宅では昼食の用意が出来たといって職人たちを呼び集めた。火を囲んでいた者は焚火のあと始末を十分にしたりもしたが、どこか不十分なところがあつたとみえ、残り火が強風にあおられて横の鉋屑に燃え移った。その火はさらに隣の葉蔭屋に移った。

材木屋で気がついたときはもう手がつけられないくら

いに火が燃え上がっている。激しい風は炎を横倒しに噴きつのらせ、火の粉を霰のように飛散させた。これが江戸三大火に次ぐといわれた大火の発端である。

火はたちまち佐久間河岸一帯を舐め尽くし、日本橋、京橋を焼き尽くして芝にまで延焼した。焼失面積は、長さ一里、幅二十町、二百五十九万二千坪で、焼失の家屋も膨大なものに上った。大名屋敷だけでも六十一軒、旗本屋敷百三十軒、町家は表通りと裏通りを合わせて三十六万九千五百十二軒になったと記録されている。

往来で逃げ場を失い焼け死んだ者と、身元のわかっていない焼死者とを合わせると、二千八百人の人間がこの火事のために命を落とした。

巳の刻に出たこの火は、一時間後にはもう伝馬町あたりに迫った。ここには牢屋敷がある。

牢奉行石出帯刀が外の様子を見ると、四方に燃え移った火は牢屋敷に迫っている。風に乗った火の粉は、まるで火の矢のように降りそそぐ。牢屋敷の炎上はすぐに時間の問題となった。

石出帯刀は牢屋の役人一同を至急に集め、

「このままでは中に居る囚人どもが焼け死ぬのは必定である。たとえ重罪人がおろうとも人命には替えがたい。彼らを外に出したいが、それもまだ逃げ場が残っているうちに取り計らわなければならぬ。即刻に各牢屋の鍵を開け放して、中の者をみんな集めろ」と命令した。

一説によると、町方掛の御徒目付野宮市太夫が囚人の立退きをすすめたが、町奉行所からの達しが無いと言って帶刀が躊躇したといわれている。

牢屋敷の近辺の火事で危殆に瀕した場合、在獄の者を一時的に解放するのは、すでに明暦の火事の際に先例があった。明暦の大火のときは、当時の奉行石出帶刀（牢奉行は世襲となっている）が囚人を解放したところ、翌日指定の場所に集まらなかったのはたった一人だけだったという好成績であった。さて、今度はどうであろうか――。

伝馬町の周辺が火に焼かれていることは、むろん、牢内の囚人たちにも早くからわかっていた。

まず、半鐘がけたたましく聞こえた。次に人声が尋常

でなくなった。

それまでは比較的平静だった科人どもも、うすい煙が牢内に忍び込むようになってから騒ぎだした。

「お役人さま、お役人さま」

と、彼らは口々に言いつて格子をゆすった。

「火事は近うございます。この牢屋敷が危なくなるのはございませんか？」

役人たちも顔色を変えて外鞘を右往左往している。

「どうやら火事は大きいらしいぜ」

囚人たちはどの牢内でも言い合った。いうまでもなく、牢屋敷の中には、士分の者や神官、僧侶を入れる揚屋と女牢と一般の者を入れる大牢とがある。

どの牢も今度は騒いだ。

煙は次第に濃くなってきて、キナ臭い匂いが漂ってくる。火の粉もちらほら見えてきた。これが嚴重な構えの内部である。

「お役人さま。もし、お役人さま。どうやら火事は大きいようでございますが、早くここを出して下さりませぬか」

と、囚人たちは煙と火の粉を見て喚く。

「逃げられるうちにここを出して下さりませ。でないとまえどもは焼け死んでしまいます」

役人たちは、ただ、静まれ、静まれ、と言うだけで、具体的にどう処置するとも答えない。炎がどの辺まで延びて来ているかも知れないのだった。

「昼火事だが、ずいぶん大きいようだ」

と、中の囚人たちは喜んでゐる。

「もっと焼ける。もっと大きくなれ」

囚人たちは、明暦の火事以来、伝馬町が危なくなつたときは在獄の者を一時釈放する慣例を知っているのだ。

みんなで関とぎの声をあげるように大騒ぎをはじめた。

源次げんじもその中にいた。彼はこの牢には初めて入つたのだが、判決の申渡しを待っている男である。

ほかの者が格子をゆすり、床を足で踏み鳴らし、怒号するので、源次もその真似まねをした。彼には牢内のことはよくわからない。とにかく、日ごろ畳を積み上げ傲慢ごうまんに構かまえている牢名主や、次に威張いかばかっている隅の隠居、新入りを虐いじめている二番役、三番役といったところの下知げちで、皆と一しょに、

「お役人さま、お役人さま」

と呼んでいた。

「もし、ちょっと伺いますが」

と、源次は、同囚の眼つきの悪い上州無宿の勘八かんぱちに訊きいた。

「火事が起こると、わっちどもは外に出されるのでございますかえ？」

月代さかやきも髭ひげも伸びて熊みたいになつてゐる勘八はじろりと睨にらんで、

「あたりめえよ。おめえだつて命が惜しいだろう。お奉行さまはな、火事でおれたちを殺してしまえば落度らくどになるのだ。だからその前に逃がしてくれるのだ」

キナ臭い匂いはいよいよひどくなり、煙も黒くなつた。

牢屋敷を取り巻く堀ほりの外で助けを呼び合う叫びが、ここまで聞こえてくる。

囚人どもがますます騒ぎ立ててゐるとき外鞘から鍵役が走ってきて、

「静まれ、今おまえたちを外に出してやる。出たらおとなしく中庭に集まるのだ。いいか。一人でも無法なことをするでないぞ」

と告げた。囚人は歓声をあげた。

鍵役が牢前の格子を開けると、待っていたように牢名主から先に出入り口を匍い出してきた。狭い穴のような口なので大勢で詰め合っている人間は一どきにさばききれない。隅の隠居、二番役、三番役といったところは日ごろの威厳にものをいわせて先に出るが、あとはわれ先にと出口で揉み合い争っている。なかには喧嘩が起こり、疵を受ける者もある。

役人が、いくら静まれと連呼しても、火事という異常な事態に興奮しているのと、助かりたい、自由な外に出たいという本能的な衝動が、どんな制止も受け付けない。

ようやく外鞘に出されると、棒を持った役人連中が囚人の群れの両脇を警固して中庭に先導する。ここには各牢から集まった者がおよそ百二、三十人もいたが、むろん、揚屋、女牢の人間も一しよだ。

ここまで来て見ると、空がまるで水に墨を流したように黒煙で蔽われている。煙はすぐそばの屋根の上から渦巻き、火の粉を無数に降らしている。塀外には逃げ惑う男女の叫喚が耳をつんざくようだった。

「一同、静まれ」

と、重立った役人が囚人たちを制止した。

「ただ今からお奉行さまの達しがある。静まれ」

その声につづいて、四十年配の恰幅のいい男が火事装束に身を固めて一同の前に現われた。奉行石出帶刀だ。

「皆の者、よう聞け」

と、彼は言った。

「見る通り、この屋敷のぐるりは大火事となっている。

このままにして置くと、この牢屋敷も火事となり、牢にいますおまえたちが焼け死ぬのは必定じゃ。よって、お上のご慈悲により今からおまえたちを放つ……」

わあっ、という声が思わず囚人たちの間に起こった。

帶刀は手をあげてそれを制止し、

「これ、控えろ。これからが大事な話ゆえ、よく聞け」

と、一段と声を張り上げた。

「今のうちなら逃げ途は残っている。も少し遅れると、煙や火に巻かれて路上で焼け死ぬかもしれない。一刻を争う急場ゆえ急いで申し渡すが、おまえたちは明朝辰の刻（午前八時）までに本所の回向院へ行っているのだ。よいな？ このお上のご慈悲をありがたく思っ、必ずその

時刻までに集まるように。もし、万一……」

と、ここで帯刀はしつかりと言ひ渡した。

「もし、万一、この命令に違背し、刻限までに回向院へ戻ってこぬ者は、あとで召し捕りのうえ死罪または遠島とする。また、お上のご慈悲をよくわきまえて素直に立ち戻った者には罪一等を減じる」

牢屋奉行石出帯刀の解放命令は囚人たちを喜ばせた。

真一文字に開かれた牢屋敷の表門から、おびただしい囚人が外に奔流した。

このとき火は四方から迫っていた。ことに火元の佐久間町から神田一帯は火の海で、渦巻く黒煙のために天日も見えない。日本橋方面は、本石町から瀬戸物町にかけて延焼のさなかだった。さらに、飛び火は南の堀留、堀江、材木町一帯を舐めている。囚人たちが表へ出ても顔が焙られるくらいに熱かった。

伝馬町の北側には濠がある。その向こう側が神田の紺屋町、鍛冶町になるが、ここでは火に追われた人たちが濠の水の中に飛び込み、芋の子を洗うようだった。猛火はいつこの人たちの頭の上を焼くかしないのだ。まさ

にこの世の地獄が現出している。

わずかに血路といえ、小伝馬町から馬喰町、横山町を通過して両国橋と浅草御門のほうへ向かう通りだ。しかし、この辺に火が移るのも時間の問題となっている。事実、このときから半刻後に浅草御門わきの広大な郡代屋敷が焼け落ちた。

こうなると無宿の囚人たちは強かった。家も無いし、家財に執着する心配も無い。家族も居ないから、それこそ裸一貫のありがたさだ。むしろ娑婆の人間がうるたえ叫んで逃げ回っているのが面白くて仕方がない。

火の付いている荷を大八車に載せて行く者、背中に背負えるだけの風呂敷包みを負って逃げ惑っている者、互いが離れまいとして手をつなぎ、煙にむせびながら走っている夫婦や親子づれ、どの顔も生きた色が無いのだ。なかには往來で焼け死んでいる者もいるし、群衆に踏まれて倒れたままになっている者もいる。

長い間牢獄に監禁されていた連中は動物的になっていた。動物は火を見ると猛り立つ。それと同じ現象が彼らの上に起こっていた。一つは疎外されている人間が日ごろの鬱憤をこの際とばかり晴らそうとするのだ。火がそ

ここに迫っているというのに、よその家に押し込んで物品を略奪したり女を捕える。目的も無く家の中を叩き壊す。地獄に鬼が暴れ出したようなものだ。

同囚意識というのか、仲間心理のためか、彼らは三々五々、一団となって乱暴を働く。ゲラゲラと笑う者もいるし、わけのわからぬことを喚いている者もいる。女たちは髪を振り乱して逃げ回っている。乱暴者はそれがおかしいといって哄笑する。

源次は、ほかの仲間と火の粉をかぶりながら走っていたが、囚人連中がそんな乱暴を働くのにとっても一しよになつてやる気は起こらなかった。眼をつぶりたいくらいだ。それに火に追われているので、少しでも足を停めるのが不安でならない。

囚人の多くは道々そんな乱暴をしながら川向こうの回向院に向かっている。源次も夢中で皆の走る方向について行くだけだった。

両国橋にかかると、一般の避難民で橋の上が身動きできないうる混雑ぶりだ。誰の思いも同じことで、大川を越せばまず命だけは助かると思つてゐる。

源次の耳もとに、キャッ、と女の叫びが聞こえたの

で、びっくりして見ると、囚人の一人が前をゆく女の横面を殴りつけているところだった。

殴られた女の横に亭主らしい男がいたが、

「何をしゃアがる」

と、乱暴者を振り返った。が、その顔はたちまち怯んだ。

「何んだと？」

と、女を殴ったほうがすごんだ。髪と髭に蔽われている顔はまるで熊みたいな人相になっている。誰が見ても牢から出た人間だとわかった。職人らしい亭主も、その男に睨まれてあとの言葉を呑んでいる。

「やい、間抜けめ。てめえの女房なら、もっと邪魔でねえ所を歩かせろ。それともおれに文句があるか？ あるならいつでも相手になつてやるぜ」

職人は顔を押えている女房の手を取つて逃げた。

「ざまア見やがれ」

と、髭面は勝ち誇つたように言った。

「やいやい、おれの前を塞ぐ奴はみんなこれだ。そこをどけどけ。おれはたった今伝馬町の牢から出てきた人間だ。死罪と決まった科人だ。こわい者なしだ。気に入ら

ねえ奴はいつでも相手になつてやる」

大きな声にみんな怖れをなして道をあけている。

源次がふと見ると、これは同じ牢にいた上州無宿の勘八だった。向こうでもそれに気がついて、

「おう、われア源次じゃねえか」

とふり向いた。

「うむ、勘八か」

「勘八かもねえもんだ。おめえ、牢を出てからどうしたかと思つたら、ちゃんとおれのうしろについて来ていたのだな」

「いや、ただ夢中で走っているうちにおめえが前にいたのだ」

「何ンでもいいや。同じ牢内で物相飯を食つた仲間だ。

見ろ、おれの前にもちゃんと人さまが道をあけてくれてらア。遠慮することはねえ。大手を振って歩こうぜ」

「おめえがあんまり乱暴するからだ」

「なに、これぐれえのことは当たりめえだ。おれたちは長い間暗い所で不自由な目をみている。それにひきかえ、こいつらは勝手気ままなことをしたのだ。こんな釣合いの取れねえ話はねえ。おれは腹が立ってならねえの

だ」

半鐘がほうぼうでけたたましく鳴っている。煙は川の上まで蔽っていた。

「面白えや」と、勘八は声をあげて笑つた。「もっと焼ける。何もかも焼けてしまえ。そしてみんな死んでしまえ」

囚人は勘八と源次だけではなく追々とそこにかたまつてくる。

「どうも腹が減つたな」と、仲間の一人が言つた。「この騒ぎじゃ飯も食わせる所がねえ。おい、回向院に行つたら、何ンでもいいから、寺のものをたらふく腹に詰め込もうぜ」

「そうだそうだ」と、別な男が調子を合わせた。「どうせ、おいらは明日の朝までの娑婆だ。その間だけでも思ふ存分思い通りのことをしようぜ」

「源次」と、勘八が呼んだ。「おめえ、何をそんなにおたおたしている？　こうなりや役人も岡っ引もねえ。こんなおかしいことは生きている間に二度とはねえぜ」

囚人の一団は回向院に到着した。

回向院では牢屋奉行から通告があったので渋々ながらも彼らを受け入れた。髪も髭もぼうぼうと伸ばして垢まみれの、きたない連中だから、住職が納所に、

「本堂の畳を全部裏返しにして上げてやれ。それから、こちらの指図通りおとなしく控えるように言い渡すがい」

と命じた。

囚人たちは、納所や小坊主たちが寺男と一しよに畳をはぐって裏返すのを見て、まず、嚇おそとなつたらしい。

「もし、坊さんえ。畳の裏返しは、なんのためですかえ？」

一人がせせら笑って訊いた。

「そうではない。おまえたちがそんな身なりで上がり込んだら、本堂が汚れるでな。今夜はここに寝かせてやるが、この住職の指図をおとなしく守って、万事静かにするのだ」

納所が言い聞かせた。

先に立った者が仲間を振り返って「おい、聞いたか。

おれたちが泊まるために、この寺ではわざわざ畳の裏を返すのだとよ。お住職の指図に従って、みんな神妙にさ

し控えているとお言葉だ」

と告げた。すると、うしろのほうで、

「ありがたいことだ」

と声があがった。

「ひとつ、その畳の裏に早えとこすわらせてもらおうか」

「そうだそうだ。早えとこ横になろう」

と、囚人たちはどやどやと本堂の階きざはしに上がりこんできた。

「おい、ちょっと待ってくれ。もう少し畳の裏返しが残っているでな、しばらくその庭に待っている」

納所があわてて止めた。

「なに、おまえさんたちにそんな手間をわずらわしちや申し訳がねえ。おい、みんな」

と、一座の中で言ったのが勘八だった。

「おれたちも手伝おうぜ」

七、八人がまだ裏返してない青畳を土足で踏んだ。

「これこれ」

と、納所や寺男があわてて制止したが、囚人たちはあざ笑った。

「さあ、手伝いだ、手伝いだ」

と言うなり、今まで裏返しの終わった畳を、今度は各自がてんでに持ち上げ、わざわざきれいな表のほうに戻した。

「これ、そんな乱暴を」

納所と寺男が蒼くなっていると、

「何をぬかしやアがる」

と、囚人たちは怒鳴った。

「おれたちは犬猫じゃねえぜ。人間さまを畳の裏にすわらせるとは聞いて呆れる。よし、そんならこうだ」

と、誰かが途中で盗んできたらしい出刃包丁を懐から取り出すと、いきなり畳の表を片っ端から切り裂いた。「やいやい、おれたちにおとなしくしているとは何んだ。坊主、おめえたちは、いつからお役人さまになったのだ？」

住職はじめ回向院の坊主は、囚人の剣幕に肝を潰している。

川を一つ隔てて神田、日本橋一帯は火の海だ。この光景は東京大空襲の火を想像するとよい。奉行所の者も、むろん、ここまでは手が回らない。いわば無警察状態だ

った。土地の岡っ引や目明しもいるが、様子を聞いて駆けつけようともせず、見て見ぬふりをしている。

囚人たちはいいよ、その本領を発揮してきた。

「やい、坊主、飯をたけ。この寺は裕福だろうから、さぞかし檀徒からの寄進も多いだろう。有金を全部出せ」

てんでに金をまき上げた上、次は酒だった。

なにしろ、ここに集まっただけでも五十人を越す人数だから手がつけれられない。坊主たちは慄えながら言うままになるほかはない。

囚人たちは本堂ばかりでなく庫裡まで入ってきて、住職の居間を占領している。

「さあ、今夜はゆっくりと絹蒲団に寝られるぞ」

と、寺が客用として大事にしまっている蒲団を片っ端から出して、きたない足で寝ころがる。牢内では名主や役付の者が広い場所を占領し、他の者は前の男の背中にもたれて睡るぐらゐに窮屈な思いをしている。外鞘には、夜となく昼となく牢役人が見回りにきて、監視されている。そんな縛られた生活から、自由気ままな所にいるがけなく一ぺんに出てきたので、みんな有頂天になっている。

そこに本能的な解放感が群集心理となつて溶け合い、あらゆる乱暴を尽くすことになるのだ。

なかには本堂の仏壇に向かつて小便をする者がいる。

「やい、罰を当てるなら当ててみる」

と、尻をまくつて仏像に糞をたれる者がいる。

酒を喰い、飯をたらふく食つた挙句、さて、最後に欲しいものとなると女だ。抑圧されていた本能が女捜しとなる。

明暦の火事とき、当時の牢奉行石出帯刀の命令を聞いて、たった一人を除くほかは全員が無事に牢に帰った例からみると、このときの囚人は道義が地に落ちたといえよう。

だが、それは囚人だけではない。世の中自体が頹廢してきていたのだ。消費経済の発達で武士の生活が町人に圧迫されている。それは当然に町人の富裕階級を贅沢三昧に赴かせ、さらには江戸市民の頹廢生活を促し、あらゆる享樂的な文化が氾濫する。岡場所が各地にふえたのもこの頃である。

この風潮は、逆に武士階級の生活を転落させた。先祖代々の扶持米だけでは膨張した消費生活に追いつかず、

大名といわず、家来といわず貧乏になった。武道はすたれ、武士自身が虚無的、刹那的となっている。

文政の大火における囚人の集団暴行は、この社会背景から見なければならぬ。

夜になった。

だが、朝の巳の刻（十時）に出火した火災は、神田、日本橋一帯をなめ尽くして、まだ余燼を夜空に赤く映えさせている。

囚人たちは完全に回向院をわがものにした。寺にあるもので略奪できるものは略奪し尽くしたが、さて、彼らには明日伝馬町の牢に帰らなければならぬ拘束が大きいのかかっている。

奉行の言いつけに背いて帰らなければ重罪となる。

誰でも逃げたいのは山々だが、火事がおさまつて奉行所の追及がはじまると思えば軽々しい行動はできない。逃げおおせればよいが、捕えられると死罪にもなりかねないのだ。

まだ空を焦がしている赤い火、何千戸となく焼けた家、数千にもものぼる焼死者、その十倍にも達する罹災者

の群れ、今夜の寝場所を求めて右往左往する群衆、まさに天変地異の動乱を眼のあたりに見るようだ。

こんなものを眼のあたりにしていると、おとなしく牢に帰るのはばかしくなってくる。

源次は、牢に帰るつもりで回向院の本堂におとなしく寝ていた。見渡すと、残っている者はかぞえるほどしかない。ほとんどが、どこかに逃走しているのだ。

源次の入牢は、それほど大きな罪を犯したからではない。たかだか博奕ばくちをして運悪く縄張り内の岡っ引に捕えられたからだ。下谷したやの梅三郎うめさぶろうという岡っ引に睨にらまれてい

たのが不運で、普通なら眼こぼしをしてもらえるところなのだ。

源次は、明日伝馬町に帰れば、間違いなく釈放されると思っている。無理に逃げて罪を重くすることはないのだった。彼は気楽だった。

源次は、夜中に眼をさました。久しぶりに畳の上で柔らかい蒲団の感触を楽しんだのだが、宵のうちに相当飲み食いしているので咽喉のどが渴かわいたのだ。

はじめて来た寺のことだし、広いので、台所がどこにあるかわからない。寺の者はみんな逃げ失せている。

